日銀日記　岩田規久男

日本経済をここまでダメにしたのは誰か？　デフレから脱却し、経済成長を達成するべく、日銀副総裁を務めた経済学者による5年間の記録。歴史的転換点に立ち会え。【商品解説】

発売前なので、ネットからの情報です。

　本書は、2013年3月から2018年３月まで日本銀行副総裁の職にあった岩田規久男氏が綴った日記を整理したもの。

日銀日記

　本書は、2013年3月から2018年３月まで日本銀行副総裁の職にあった岩田規久男氏が綴った日記を整理したもの。

第1章 異次元の「量的・質的金融緩和政策」の船出

　新たな日銀の歴史が始まる

　量的・質的金融緩和の幕開け

　論争の歴史を振り返る

　リフレ政策への政治家の反応

第2章 想定通りに展開した「量的・質的金融緩和」最初の一年

　円ドルレート・株価はどう動いたか

　バーナンキ議長の議会証言

　金融で重視すべきこと

　バーナンキ発言の影響

　誤解が多い金利と金融政策の関係

　消費税増税がもたらすもの

　増税をめぐる水面下でのやりとり

　黒田総裁の「どえらいリスク」発言

　総裁が増税延期を心配する理由

　「リカーディアン的行動」の誤解

　国債の負担とは何か

　反リフレ派やメディアからの批判のどこがおかしいか

　金融緩和が企業・銀行へ与えた影響

　雇用状況は本当に良くなったのか

第3章 消費税増税で壊れた「リフレ・レジーム」

　楽観的すぎる「月例経済報告」

　海外の経済学者との意見交換

　消費税増税の影響は?

　非ケインズ効果」への過剰な期待

　追加緩和すべきかどうか

　ユーロ経済のデフレ・リスク

　マイナス成長へ転落

　アベノノミクスに足りないもの

　メディアはなぜ真実を伝えないのか

　消費税増税に対する様々な懸念

　デフレ型ビジネスでは生き残れない

第4章 「経済音痴」の民主党国会議員の対応に追われる日々

　的外れな質問を繰り返す議員たち

　数少ないリフレの意味をわかっている人たち

　物価の正しい見方

　バーナンキ発言の意味がなぜわからないのか

　繰り返される不毛な質問

　円安で企業はどうなるのか

　賃金の変化を正確に読み取るために

　消費低迷の真相

　金融政策で全て解決できるとは言っていない

　日銀執行部のレジューム・チェンジ

第5章 逆風に抗して、金融政策の転換

　円高の始まり

　マイナス金利の巧妙な仕掛け

　米経済学者の柔軟さが日本にあるか

　マイナス金利でも円高に

　財政と金融のバランスをどう取るか

　確信的な方針が打ち出せない

　株価を大きく下げるリスク

　イールドカーブをコントロールするべきか

　円ドルレートの決まり方

　イールドカーブ・コントロールの実行をへ

　マイナス金利政策の誤解

　金融政策と財政政策の協調の必要性

　混乱のの2016年を振り返る

第6章 デフレ完全脱却のための「リフレ・レジーム」の再構築

　トランプ大統領に振り回される経済

　株価が上がらなければデフレ脱却はありえない

　経済データを振り返る

　人手不足の下で、なぜ、企業は人件費の増加の抑制に成功したか

　どうすれば賃金が上がるか

　企業行動に変化が現れる

　アベノミクスのポジティブな効果

　退任に向けた総括

　2%達成を拒んだ様々な要因

　民主党政権の時代と比べて経済は明らかに良くなった

　アベノミクスで雇用はどう変化したか

　任期を終えてーー「リフレ・レジュームの再構築」が不可欠

終わりに

　デフレを伴った長期停滞に陥った日本経済において、日本銀行の金融政策を批判し続けてきた岩田氏が副総裁の立場で苦闘した様が、多様な人々との関わりと共に活写されている。安倍政権の経済政策（アベノミクス）や、アベノミクスの第一の矢として位置づけられた「大胆な金融政策」がどのような形で行われたのかという点については既に政策担当者への取材を通じまとめられた類書もある。だが、やはり金融政策の理論的支柱であった岩田氏の目線からの回顧は貴重であり、その金融政策への是非はともかくとして一読に値する本である。印象に残った点を三点。

　まず、時々に記された日記という本書の体裁が、読者に活き活きとした臨場感を与えるという点である。特に、2013年4月の「異次元の金融緩和策」、2014年4月の消費税率引き上げ、2014年10月の追加緩和、その後の原油安や世界経済の変調、2016年2月のマイナス金利政策の導入、2016年９月の総括検証と「長短金利操作付き量的質的金融緩和」への移行、といった出来事を巡って、岩田氏が何をどう考え、政策決定がいかになされたのか、昭和恐慌研究会を含む「岩田ゼミ」の面々がどう関わったのかという点が活写されており、やはり事実は小説よりも面白く興味深いと感じる。政策形成過程をより深く知るという意味では、日銀執行部に属する岩田氏と企画局との関係の解明や政策決定会合の議事録の公表を待つ必要があるが、（その点を考慮に入れてもおそらく）必要十分だと感じる内容である。

　次は、金融政策をつかさどる中央銀行副総裁としての岩田氏と政治家との関わりである。大学教授時代から論客としてならした岩田氏からすれば、反論は許されず、理不尽な扱いに黙って耐えるという国会質問は耐え難いものであったのだろう。経済政策を巡る議論は、まず事実を事実としてきちんと認識することが必要だ。この点、国会質問に関する日記は、金融政策に関する俗説への批判集としても読むことができ、興味深い。

　「異次元の金融緩和策」は当初は大きな成果を挙げ、日本経済は「２％の物価安定目標」の到達まであと一歩の所まで到達した。しかし、デフレからの完全脱却途上に行われた８％への消費税率引き上げは、「リフレ・レジーム」を毀損させ、物価に関しては目標からは未だ程遠いのが現状である。海外経済の不確実性が増す中で19年10月には再び消費税率引き上げが予定されているが、本当に影響は軽微といえるのか。デフレからの完全脱却は可能なのか、疑問である。岩田氏はデフレ完全脱却のために、財政政策、社会保障政策、及び成長戦略が需要を喚起する「リフレ・レジーム」になっておらず、「リフレ・レジームの再構築」が不可欠であると説く。本書を読むと「リフレ・レジームの再構築」は政府・日銀を含めた多様な政策担当者の連携が不可欠であると感じる。

　問題はそうした連携がどうしたら可能なのかという事なのだろう。